

## セッション1 <基調講演・シンポジウム>記録

テーマ「インクルーシブ教育システム構築に向けた学校・地域の取組」

### ○基調講演

テーマ：「インクルーシブ教育システム構築に向けた学校・地域の取組 ～みんなが資源 みんなで支援～」

司会：柘植 雅義（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員）

講演者：石隈 利紀 氏（筑波大学副学長／附属学校教育局教育長）

石隈利紀氏（筑波大学副学長／附属学校教育局教育長）より、インクルーシブ教育システムの構築に向けた学校や地域の取組について、「みんなが資源 みんなで支援」をキーワードとして、学校心理学の立場から、①三段階の心理教育的援助サービス、②三層の心理教育的援助サービスのシステム、③学校・家庭・地域の連携、の3点について説明がなされた。①では、教育が提供できる支援として、援助のニーズの内容や程度に応じて段階的に三つの心理教育的援助サービスが行われていること、②では、子どもがトータルにどのような援助サービスを受けているかの視点が大切であり、「個別の援助チーム」、「コーディネーション委員会」（校内委員会等）、「マネジメント委員会」（運営委員会、企画委員会等）の三層のシステムがあり、特別支援教育を充実させるためには特別支援教育コーディネーターがこれらのシステムに参加することが重要であること、③では、学校・家庭・地域の連携を図っていくためには、保護者のエンパワーメントと保護者・学校のパートナーシップの促進、子育てに関するコミュニティワークの充実、「援助資源マップ」の作成・改定・活用の3点がポイントとなることが説明された。

### ○シンポジウム

司会：柘植 雅義（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員）

シンポジスト：本道利枝子 氏（青森県八戸市立下長中学校教諭）

樋口 陽子 氏（北九州市立小倉南特別支援学校主幹教諭）

田中 裕一 氏（兵庫県教育委員会事務局特別支援教育課指導主事）

内田 照雄 氏（日本自閉症協会理事／神奈川県自閉症協会会長）

指定討論者：石隈 利紀 氏（筑波大学副学長／附属学校教育局教育長）

### <話題提供>

#### ・話題1

本道利枝子氏より、中学校における校内支援体制の構築について、自校での取組、現状と課題について話題提供がなされた。通常の学級と特別支援学級、中学校と高等学校、中学校と地域の関係機関等を「つなぐ」ことを意識した校内支援体制を構築していること、特別支援教育推進のための校内支援体制は、予防的な生徒指導という視点から、全職員が共通理解のもと取り組んでいること、体制としては3名の特別支援教育コーディネーターがそれぞれの得意分野を担当するようにしていること、わかる授業づくりなど学習環境の整備に取り組んでいること等が紹介された。

#### ・話題2

樋口陽子氏より、北九州市で取り組まれている就学移行期の支援に関わって、①幼稚園で年長児クラス全体に行う「わくわくスクール」、②小学校の就学時健診や体験入学に協力して幼児の実態整理をしている取組、について話題提供がなされた。取組の成果として、幼稚園や小学校における教育的ニーズの把握を協働で行い、対応を考えることができたこと等が挙げられた。

#### ・話題3

田中裕一氏より、兵庫県におけるインクルーシブ教育システム構築モデル事業として取り組まれているスクールクラスターや交流及び共同学習、特別支援学校のセンター的機能充実事業について話題提供がなされた。今後

の方向性として、①一人一人の多様な教育的ニーズに応じた特別支援教育の充実、②すべての教職員の特別支援教育に関する専門性の向上、③早期からの支援につなぐ相談・支援体制作り、が示された。また、交流及び共同学習での取組を、どのように個別の指導計画に反映させていくのかが課題であること等が述べられた。

#### ・話題 4

内田照雄氏より、自閉症のある子どもを持つ保護者の立場から、親の会における教育に関する活動内容や、会員へのアンケート結果からの教育の現状分析等について話題提供がなされた。自閉症のある児童生徒への教育的対応についてのアンケート調査結果から、特別支援学校では高等部への進学時に課題が多くなること、小中学校では支援シートや個別の指導計画の改善に対する保護者の期待が大きいことが報告された。

(以上、要項 P.6-P.10 参照)

#### <指定討論(石隈利紀氏)>

・話題 1 について：定例会と臨時会、3人のコーディネーター中心の支援、そして各担任へのつなぎなど、印象的な取組である。小学校からの入学の引き継ぎシートは、新しい先生でも活用できるものである。

・話題 2 について：「わくわくスクール」は、大変興味深い取組である。内容には、学習面と生活面があり、学びの姿勢を育てているものである。参加する子どもの理解と支援につながっている。

・話題 3 について：交流及び共同学習で、9地域で高等学校と特別支援学校がペアリングして実践していることは大変興味深い。

・話題 4 について：保護者の代弁者として、アンケートの結果を真摯に受け止めなければいけない。「失敗は成功の母にならない(=成功体験重視)」といった自閉症への理解は、もっと多くの教員が知らなければならないことである。アンケート結果から多くの示唆が得られる。

#### <指定討論者の質問及びシンポジストの回答>

##### ・本道氏への質疑応答

質問：「つなぐ」ことを意識した校内支援のシステムをどのように構築してきたのか？そのプロセスについて説明してほしい。

回答：担当者が変わるにより支援体制が変わるのでは、学校としての支援体制とは言えず、支援も続かない。校長が特別支援教育をポイントとして学校作りを行うことが必要であると考え。一つの学校の支援体制作りが、理解者・共感者が増えることで、市内各校に徐々に増えていくことを願っている。また、コーディネーター3人体制を取っているが、その中に教頭が入ることにより校外への対応はしやすくなる。

##### ・樋口氏への質疑応答

質問：「わくわくスクール」において、スキルをどこまで向上させるのかについての見立てに関して、このプログラムをどのように活用しているのか。また、それをどのように移行支援につなげているのか。

回答：クラス全体の傾向を最初に探って、どこから手をつけたら良いかを園長等と話を決めていく。特に気になる子ども、あるいは報告には上がっていないが気になる子どもについては、10タイプくらいあると承知している。保護者が賛同してくれた場合には客観的なアセスメントをして、小学校へつないでいる。「わくわくスクール」は幼稚園の活動の中に組み込んで年長幼児全員を対象に実施している。

##### ・田中氏への質疑応答

質問：兵庫県におけるインクルーシブ教育システム構築事業について、もう少し具体的に説明してほしい。また、交流及び共同学習で、9地域で高等学校と特別支援学校がペアリングして実践していることについて、特別支援学校にどんなメリットがあるのか。

回答：具体的な動きとして、高等学校と特別支援学校のペアの学校は距離的に近い学校同士としている。そのことにより打合せがしやすい。どのような授業をしたいと思っているのか、授業の内容が決まれば、支援の具体も決まってくる。交流及び共同学習による授業は複数実施している。特別支援学校のメリットは子ども

もの地固めになるということだと考えている。また、実施して気づくことは、普段の授業においては支援をしすぎているのではないかということである。進路面でのメリットは、他の高校生を見ることで、より客観的に子どもを見ることができるようになるということである。

・内田氏への質疑応答

質問：支援計画の改善の手がかりとして標準化のフォームがあると良いとのことだが、どのようなフォームだと保護者として参加しやすいと考えるのか。

回答：先生によって考え方が異なっている。現状のレベルによって目標もいろいろとあると思うが、保護者からみて、今どうなのか、今後、どうなってほしいと思っているのかを確かめることができる一つのツールがあると、担当者が変わっても客観性が保たれるのではと考えている。また、そのようなフォームがあることで、教師と保護者とが話すきっかけにつながると考える。

<参加者との質疑応答>

地域における連携に関する質問が出され、職員が変わっても仕組みが変わらず継続できるようにすること、リソースマップの作成、人材バンクの作成などの応答があった。また、参加者から、福祉との一層の連携をお願いしたいといった意見が出された。

さらに、交流及び共同学習での授業の工夫点についても質問が出され、わかる授業にするために、交流学級においては、言葉による指示は短く、授業の流れを紙に書いて提示するなどの工夫をしているとの応答がなされた。